

皮心伝心

総合診療医育成における皮膚科学教育

2016年4月から東北医科薬科大学医学部皮膚科学教室の責任者として赴任しました。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、本大学医学部は東北地方で活躍する総合診療医を育成する目的で、70年以上の伝統を有する東北薬科大学に本年度から新しく設置されたものです。医学部という組織はスタートしたばかりですが、病院はこれまでも診療活動を行っていた東北薬科大学病院を、名前を東北医科薬科大学病院と変えて引き継いだものです。われわれ皮膚科医師(といっても私(岡 昌宏)と坂口正展講師の2人しかまだいないのですが)(図1)もこれまでの東北薬科大学病院皮膚科の施設をそのまま使って診療しております。ただし、現在の病床数では大学病院として必要な病床数を満たさないらしく、現在、現病院の隣に新しい病院が建築中です。

さて、われわれの医学部では本年度に第1期生が入学したばかりですのでまだ臨床系の学生教育は始まっていないのですが、総合診療医を育成するのが目的である本学の皮膚科学教育はどうあるべきかを赴任以来思案中です。参考になるかもしれない、NHKで週1回放送中の『総合診療医 ドクターG』(全国から集まった研修医3人が、ベテラン総合診療医が解決した症例を、映像を見ながらカンファレンス形式で診断していくという番組。ベテラン総合診療医と研修医3人は毎回替わる)をよく見ていますが、皮疹を伴う症例はなかなかありませんでした。しかし最近立て続けに、「食物依存性運動誘発性アナフィラキシー」、「ジカ熱」という、皮疹が診断に大きな意味を持つ症例が出題されました。両症例とも、なるほどこのよう

な症例をこういうふうと考えさせていけば確かに学生は興味を持ち、印象に残るだろうと感心しました。

しかしながら、総合診療医を科学的に扱うこのような番組はこれまでにほとんどなかったと思います。これから需要が増すと思われます総合診療医にとっての皮膚科学の意義や重要性は、あまり顧みられていないと思われ、だからこそこれから研究する価値があるのではないかと考えています。

読者の皆様、総合診療医育成における皮膚科学教育についてのご提案やご意見がありましたら、ぜひお知らせいただきたいと思います。

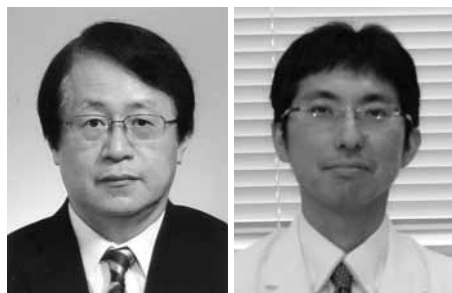


図1 東北医科薬科大学の皮膚科医師。筆者(左)と坂口正展先生(右)。

岡 昌宏

(東北医科薬科大学皮膚科 教授)